

coronavirus language—「コロナ」と“the rona”

伊藤 由起子

去年度の大会において「コロナ禍において生まれた和製英語『コロナ』の分析」と題して発表を行った際、誤った発表をしてしまった。日本では「新型コロナウイルス（感染症）」を「コロナ」と短縮しているが、英語圏では“the coronavirus”や“COVID-19”として短縮しないとしたが、これはニュースなどのオフィシャルな場面であって、実際には“the coronavirus”は“the rona”となった。（「コロナ」のようにウィルスと感染症の両方の意味は持たない。）また、日本では多くの新語が生まれ浸透したとしたが、英語圏も同様であり“boomer remover”、“iso”、“corony”、“blursday”などがある。さらに、“new normal”、“lockdown”、“social distancing”など、パンデミック後に意味が変化したものがあったり、“drive-through-testing”や“flattening the curb”などいくつかの語をつなぎ合わせた新語が生まれたり、“overshoot”、“magpie”、“covidiot”など、すでに廃れつつある語もある。

本発表では、前回の発表の続編となるが、日本語だけでなく英語との比較もしていく。

連続シンポジウム「学問的知見を英語教育に活かす」

本シンポジウムの趣旨

連続シンポジウム発起人 鴫崎 敏彦

学会の存在意義の一つに社会貢献があることは論を俟たない。そして、当学会が守備範囲としている諸分野の研究活動を社会に還元する有効な手段の一つに、その研究成果の英語教育への応用が挙げられることも、多くが認めるところだろう。そこで、最近の英語教育の動向に目を向けてみると、コミュニケーション能力が重要視されており、とにかく「慣れる」ことで英語力を育成しようとする傾向にあるように感じられる。もちろん、「慣れる」ことは大切であるし、英語をツールとして使えるようにならなければ、学習する意味がないのも当然である。

しかし、限られた時間の中で効率よく英語力を身に付けるためには、「慣れる」だけではなく、きちんと「理解」することも重要であることは間違いない。その「理解」を促す過程で、最新の研究成果はもちろんのこと、概論レベルの知識であっても、授業者の工夫次第で、学問的知見を活かすことは十分に可能であると考えている。本シンポジウムでは、「学問的知見を英語教育に活かす」というテーマのもと、各発表者が各々の専門分野における英語教育に活かすことのできる学問的知見や、その知見を活かした教授法について取り上げる。

発題者 20

日本語の古文と英語の共通性から学ぶ

野村 忠央

大津由紀雄氏（1948-）は随所で英語教育と国語教育、日本語教育の連携の重要性を説いている。例えば、本シンポジウムが書籍化された野村他編（2019）の特別寄稿大津・末岡（2019）でもそのことについて言及している。

氏が言う連携は広い意味での言語教育の一環であると考えられるが、本発表では狭い意味での言語学的特徴、すなわち日本語の古文と英語の言語学的共通性から教員や研究者が学ぶことが多々あることを具体的例から論じたい。そして、昨今、古文、漢文を入試科目から外す大学も増えてきているが、知的好奇心溢れる高校生には本発表で論ずるような「気付き」を通して、言語の共通性のみならず、改めて英語にも古文にも関心を深めて欲しい。

本発表で扱う予定のトピックとしては、反実仮想と仮定法（(1) 参照）、助動詞「べし」と英語の法助動詞・be to 不定詞、接続助詞と分詞構文・接続詞の as などを考えている。また、時間が許せば、係り結びと「か」の移動分析、完了の助動詞の選択などのトピックも扱いたい。

(1) a. 世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし（在原業平、『古今和歌集』）

b. If it *were* not for the change of seasons, how monotonous our life would be.

シンポジウム要旨

歴史上の人物は文学の中でいかに扱われているか

マックス・ウェーバー(Max Weber 1864-1920)は、『支配の諸類型』(*Die drei reinen Typen der legitimen Herrschaft*, 1922)の中で、支配には3種類があると主張している。すなわち、合法的支配、伝統的支配、カリスマ的支配である。合法的支配とは、制定規則による支配を意味し、例として官僚制的支配が挙げられる。伝統的支配とは、昔から存在する秩序と支配権力の神聖性を信じることに基づく支配であり、家父長的な支配と言える。カリスマ的支配とは、ある人物の天与の資質(charisma[語源は、ギリシア語のカリスマ(kharisma)]に対する情緒的帰依によって成立する支配である。

ある歴史上の人物がどの支配を行っているかを3つの型で説明することは難しい。なぜならば、人物によっては、複合的要素が影響していることもあるからである。全ての支配は、その「正当性」に対する信仰を喚起し、それを育成しようとする努力していることは確かであるが、支配が行われる様々な状況を考慮に入れることも必要である。「その物のあり方を左右するほどの、強い影響力を持つこと」という意味の支配は、もちろん組織や社会構造の中でも行われうるが、特殊な際立った特徴を持った人物が職業や分野など(例えば芸術家など)において組織や社会構造の枠の外で行いうる支配でもある。

支配は、文化諸現象に対しても影響を与えている。正統的とみなされる話し方や書き方の形式を作り出すのは、学校で行われている支配である。一方で、学校で行われている支配の影響の及ばない形式もある。カリスマとは、生まれながらの才能であり、習得されたりたたき込まれたりしうるものではなく、生まれながらの才能により独自の形式を生み出す人物もいるからである。大衆を相手にする場合、時代の風潮なども考慮に入れる必要がある。このような要因から、歴史上の人物を支配の類型で範疇分けすることは全く不可能ではないにしても難しいと言える。また、『平家物語』に「盛者必衰の理」とあるように、ある人物の人生に栄枯盛衰はつきものである。平清盛(1118-1181)は、太政大臣にまで登りつめ、権勢をほしいままにするが、平家は最終的に源氏に滅ぼされてしまう。それぞれの栄枯盛衰に伴

って、歴史上の人物は異なる側面を提示する。

本シンポジウムでは、それぞれのパネリストが関心を持つ歴史上の人物が文学の中でいかに描写されているかを多面的に考察することにより、歴史上の人物の実像と虚像に迫り、できればどのような支配・影響力を人々に及ぼしているかについて探ってみたい。

(文責：吉田一穂)

シェイクスピアによるヘンリー8世とディケンズによるヘンリー8世

吉 田 一 穂

ヘンリー8世 (Henry VIII, 在位：1509-47) は、6度の結婚だけでなく、ローマ・カトリック教会からのイングランド国教会の分離によっても知られている。ローマ教皇と対立し、修道院を解散し、自ら国教会の首長となった。魅力的で教養がありカリスマ性のあった統治者であると評価される場合もあるが、好色、利己的、無慈悲な側面も指摘されている。

ヘンリー8世がイングランドがプロテスタントを受け入れる上で、また、英国国教会を形成する上で大きな役割を果たしたと言ってしまう間違いはないが、その背景には、犠牲者たちがいたことを忘れてはならない。そもそも英国国教会が形成されるきっかけが何であるかを考えるとき、ヘンリー8世が名君としてよりもむしろ暴君としての側面を持っていたことが浮き彫りとなる。文学ではウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616) が *King Henry VIII* でヘンリー8世を扱っていることが有名であるが、チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) もまたヘンリー8世を扱っている。両者のヘンリー8世についての取り扱いには特徴があるのだろうか。発表ではこの点について考察してみたい。

ミーティヤードが描いた「大工業の英雄」、ジョサイア・ウエッジウッド

閑 田 朋 子

陶器で有名なウエッジウッド社の創立者であるジョサイア・ウエッジウッド (Josiah Wedgwood, 1730-95) が生きた時代に、英国はいまだ産業革命の真っ只中であつた。そのため産業革命以前の価値観を引きずる同世代の作家には、ジョサイアのような大工業 (工場制機械工業) の実業家の人生を記録する重要性が、明確には意識されていなかったようである。結果として、ジョサイアおよびその工場に関する貴重な資料は四散することになった。

しかしながら、死後約70年を経て、彼の人生は、英国の初期取材・調査型女性ジャーナリスト、イライザ・ミーティヤード (Eliza Meteyard, 1816-79) によって、「大工業の英雄」として、伝記に残されることになる。『ジョサイア・ウエッジウッドの生涯』 (*The Life of Josiah Wedgwood, 2 vols, 1865-66*) は、ミーティヤードの代表作となり、後世において長く評価され、いわばウエッジウッドの伝記の古典となった。本報告は、ある人物の人生を伝記を残すに値すると考える社会の評価基準に注目しつつ、ミーティヤードが、どのような「大工業の英雄」像を描いたのか、考察するものである。

近代民主主義が産み出した英雄—カーライルのナポレオン観

岡田 俊之輔

トマス・カーライル (Thomas Carlyle, 1795-1881) の『英雄崇拜論』(*On Heroes, Hero-Worship and the Heroic in History*, 1841) は元々講演録であり、全6講から成るが、最終講の演題は「帝王としての英雄(The Hero as King)」と云ひ、そして「クロムウェル、ナポレオン：近代革命主義(Cromwell, Napoleon: Modern Revolutionism)」との副題が附いてゐる。全體の8割方はオリヴァー・クロムウェル論に割かれてをり、ナポレオン論自體の分量はさほど多くはない。けれども讀者は自づと、清教徒の護國卿との對比を餘儀なくされ、この稀代の英雄ナポレオン・ボナパルト (Napoléon Bonaparte, 1769-1821) が正に近代民主主義の申し子に他ならぬゆゑを理解する事であらう。

上記の論攷を主文献とするが、その他カーライルのフランス革命史論 (*The French Revolution: A History*, 1837) や、彼の知友でもあつたアメリカ人ラルフ・ウォルドウ・エマソン (Ralph Waldo Emerson, 1803-82) のナポレオン論 (‘Napoleon, or the Man of the World’, in *Representative Men: Seven Lectures*, 1850) 等々を適宜参照しつつ、時代に選ばれ時代に捨てられた英雄の姿を振り返つて見たい。

Flower 姉妹のカリスマはいかに語られたか：

Harriet Martineau の初期作品と *Biographical Sketches* を軸に

大竹 麻衣子

Eliza Flower (1803-1846) と Sarah Flower (1805-1848) は、1830年代から40年代のユニテリアン派の急進派知識人サークルにおいて、カリスマ的な魅力と才能で人々を引き寄せ、大きな影響力を持った姉妹である。特に Eliza はその類稀な美しさと精神性によって会う人すべてを魅了したと言われ、*Oxford Dictionary of National Biography (ODNB)* は、彼女に心酔していた著名人の例として Robert Browning (1812-89) や J.S. Mill (1806-73) などを挙げている。Flower 姉妹は、それぞれ作曲家と詩人として *ODNB* に名を連ねており、二人の作詞作曲による讚美歌には英語圏において現在まで広く知られているものもあるという。しかし、彼女たちが後世に名を残したかと言えば否定せざるを得ない。多くの「歴史上の著名人」を魅了するほどのカリスマを持ちながら、彼女たち自身は今では「歴史に埋もれた存在」となっている。ヴィクトリア朝を代表する著述家の Harriet Martineau (1802-76) も、若き日に彼女たちに強く惹きつけられ、親交を結んだ。Martineau が姉妹から受けた印象の強さは、彼女が少なくとも2つのフィクション作品において、明らかにこの姉妹をモデルとするヒロインを描いていることから推察できる。また、後年の Martineau は、自身が *Daily News* に匿名寄稿した追悼記事を再収録した *Biographical Sketches* の序文で、人物評伝を書く上での独自の信念や視点を述べている。本発表では、これらの著作を軸に、同時代の限られた人々に強烈な印象と影響を与えつつ、歴史に埋もれてしまった彼女たちの「カリスマ」は、Martineau によってどのように描かれたのか、また、そこには Martineau の人間や社会に対するどのような考え方が投影されているのかを探ってみたい。